

看護部 広報企画課 課長 梅川 由紀



医療情報を的確に捉え、看護の質の向上とよりよい患者サービスの提供を目指し、2016年8月、看護部に広報企画課が新設されました。主な業務内容は、様々な情報の中から指標となるデータを整理・可視化し、現状分析から戦略的マネジメントに有効な指標を提供すること、情報と意思を正確・迅速に地域へ発信し、広報活動を行うことです。

当課の役割は、積み重ねたデータ結果から導き出した根拠を業務の効率化や目標管理に繋げ、円滑な運用・推進に向け看護部として取り組むことです。また、経営参画をふまえた検証を繰り返し行うことで、医療や経営の質の向上へと繋げていきたいと考えております。

2016年4月の診療報酬改定で、「地域包括ケアシステムの推進と医療機能の

分化・強化、連携」が重点課題として挙げられました。2025年に向け、更に機能分化が進むことが予想されます。診療報酬改定や政策を基にデータを取り、地域住民に必要な医療や自院が地域で担うべき役割をふまえ、看護部の視点から見た情報を発信し、病院経営に貢献することを目指しています。

当院は病院群輪番制で二次救急を担っており、2015年8月からは救急病床を開設、運用していますが、HCUの新たな看護単位の開設に向けても検討を続けています。HCU開設により、重症患者や救急患者の受け入れ体制が更に強化され、一般病棟の看護体制の負担軽減が期待できます。

現在、医療事務部と連携しながら、想

定病床数や稼働率別に年間収益シミュレーションを算定し、HCU用の重症度、医療・看護必要度の評価基準を満たす該当者を抽出し、さらに病状・患者背景を考慮したHCU入室対象患者の絞り込みを行っています。

①院内患者でHCU基準を満たす患者数の試算

②HCU新設後の一般病棟の重症度、医療・看護必要度スコアへの影響について、毎日データを取り検証し続けています。

「ER・外来」-「ICU」-「HCU」-「一般病棟」-「地域包括ケア病棟」-「訪問看護」の円滑な運用を通して、急性期医療の受け皿としての充実を図り、地域医療に貢献できるように努めてまいります。



救急当番日に到着した救急車

当院の救急外来について

救急看護認定看護師 主任 富岡 久美子



は小児科は小児科外来で診察を行いますが、その他の患者さんは病院の東口から南口までワンフロアになっているERで診療を行っています。

各科、歩行で来院された(ウォーク・イン)患者さんと救急車で来院された患者さんとはエリアを分けて診療していますが、ワンフロアであるため、医師や看護師の応援態勢がとりやすい配置になっています。また、感染対策として空気感染の疑いがある患者さんが救急車で来院された場合に備えて陰圧個室も整備されています。

当院は、救急当番日ごとに担当医師が当番制で診療を行っていますが、各科オンコール体制がとられており、特殊性の高い疾患、緊急を要する検査・治療・手術にも対応できるようになっています。

看護師は各部署から数名ずつ救急チームに所属し、そのスタッフを対象に月に1回研修会を実施してスキルアップを図っています。救急当番日には休日ともなると

400~500名の患者さんが来院されます。大勢の患者さんの中から緊急度の高い患者さんに迅速な対応ができるように、院内トリアージ看護師も配置しています。昨年からは着任された救急科の小田原医師とともに院内トリアージ看護師の研修会を実施し、質を高めるようにしています。

今後も医師やメディカルスタッフとの連携を強化し、チーム医療で患者さんやご家族の安心につながる救急外来になるよう努めてまいります。



初療室(陰圧個室)と救急車専用口

当院は昭和39年に救急指定病院となり、約50年以上救急医療に携わっています。年々救急患者数が増加し、特に救急車受け入れ台数は10年前と比較して倍増している現状があります。救急車で当院に搬送される患者さんのうち約55%が65歳以上、約35%が75歳以上となっており高齢化社会の影響を反映しています。

今後も2025年にむけて救急患者数は増加すると予測されていますが、さらに高齢化が進み転倒による受傷や複数疾患の併発、高齢者の独居生活、また救急車の適性利用問題など、対応に難渋する症例も増えると考えられます。

このような背景の中、生命の危機や苦痛を伴う患者さんに迅速に対応するため、平成27年10月、北棟1階にER・救急車専用口が整備されました。救急当番日に